

新居英明

(電気通信大学)

今年の第8回大会は9/17～19まで岐阜市で行われた。まず、会場に入り、登録会場では名札等はプリント出力が準備されており、短い時間で終わり感心した。発表についても登壇者数は170以上と去年よりも増えているとのことである。

発表内容については予稿に譲るとして、今回は技術展示のうち興味深かったものを取り上げてみる。

「LCD2面の偏向角変化を用いた小型3Dディスプレイ」は2枚の液晶を前後に配置し、前後に映像を分けて投影することによるDFD錯視現象を利用した3D立体表示である。これを正面から見ると十分に奥行きを感じ、2枚の画面がほんの5mmしか離れているだけとは思えない。また前後の画面の輪郭線が完全に分かれてしまうほど視点を移動すると、途端に3Dでなく感じるようになるのも興味深い。システムもまとまっており、近いうちにアミューズメント関連機器での利用が可能だと思われる。

「CirculaFloor: 全方向移動床群の循環によるロコモーションインターフェース」は座布団ほどの大きさの移動台車4台が足の着地位置に順次先回りすることで、人の歩行動作による移動を打ち消すシステムである。デモでは人がちょっとふらつくこともあったが、歩行動作が問題なく行えることを示していた。ただ、このまま方向が自在に変わると歩きにくそうで、実使用にはエスカレーターの手すりのようなものが必要ではないかと感じた。

「半球型触覚センサ」は透明の樹脂の中に球体を並べて埋め込み、接触による弾性変形を球体の位置変化として光学的にカメラで捉えるシステムである。多数の箇所

変形を同時に、カメラ1台で捉えられるために今後の小型化が期待される。デモでは、複数箇所を同時に触っても問題なく、捻り成分も出力されているのが興味深かった。

「高解像度力覚コントローラによるSPIDARの制御」ではスパイダーのモータドライバーの制御周波数を一桁上げることによる提示感覚の向上のデモを行っていた。触ってみると、明らかに堅い壁の提示が可能となっている。今回は「カチカチ」という感覚が感じられた。使用している糸等も従来と同じだそうだが、制御によりここまで変わるとは驚きである。また、壁をなぞった場合にもザラザラとした紙やすりのような感覚が感じられ、今後は手触り感の提示系デバイスとしても使用可能ではないかと思われた。今後、力覚提示で位置制御ループ10kHzというのは一つの標準になるのでは無いだろうか？

以上、予稿ではわからない点を中心にしようと、技術展示についての感想だけに絞ってみたいかがであったろうか？読者の参考になったら幸いである。

杉村昌紀

(中京大学)

2003年9月17-19日に、岐阜のぼるるプラザでVR学会第8回大会が開催された。大会では34のセッションや企業展示に加え、坂根巖夫氏(情報科学芸術大学院大学名誉学長)の招待講演が行われ、アクティブGのTAKUMI工房にてVR技術および作品の展示が行われた。

報告者は本大会2日目の「ネットワークと応用1」のセッションに登壇者として初参加した。当セッションではVRを用いたモニタリングや通信遅延に関する発表など非常に興味深い報告があった。私自身は今回が初めての発表であり、論文を書く段階から発表が終わるまでの間、苦難の道のりであった。また、会場では周りの発表者が自分より年上の方ばかりで緊張の連続であった。しかし、発表後の質疑応答では多くの方々から研究についての率直な意見や今後の方向性などについて大変有意義な意見をいただき、発表をして本当に良かったと思うことができた。また、セッション終了後も意見交換をすることでうまくコミュニケーションがとれている参加者が多く見られた。他の発表者の発表内容やスタイルのみだけでなく、研究に対する姿勢やユニークな問題解決方法など、普段の研究生活では体験できない貴重な多くの経験を得ることができた。

招待講演では坂根氏が「境界を超えて拡張するアート」



CirculaFloor

という題目でメディアアートの登場により変容してきたアートの世界を表現された。一般の聴講者もいるため、動画や音声を多用した興味深く理解しやすい講演内容であった。「メディアアートが人類のサバイバルツールとして期待されている」という言葉が印象に残った。

会場の 5 階には様々な企業の VR に関連する技術展示が行われていた。映像を 3D で閲覧できるシステムが多数展示されていたが、中でも裸眼立体視可能な大型液晶ディスプレイは圧巻であった。

大会終了後に行われた懇親会では原島会長のユーモアあふれる挨拶に始まり、赤松正行氏らによる特別イベントが開催され、報告者自身も多くの先生方と交流ができ、大変有意義な懇親会であった。

最後に、発表を終えるまで多くの支援を頂きました先生方、そして応援して下さいました友人たちに感謝の意を表したい。

◆次回大会長挨拶

美濃導彦

第 9 回大会長（京都大学）

今年度のバーチャルリアリティ大会は、JR 岐阜駅前のぼるるプラザ岐阜と隣接する ACTIVE-G で開催され、論文発表件数 179 件、参加者も総数 400 名を越える大会記録となったそうで、大変喜ばしいことです。参加された方からお話を伺いますと、数多くの最先端の研究成果が発表された講演もさることながら、長良川鶴飼い観覧のプレ懇親会に始まり、IAMAS の招待展示を含む興味深い技術・作品展示、IAMAS の坂根先生による映像たっぷりの招待講演、懇親会での IAMAS の赤松先生をはじめとするメンバーの方々による目も眩むようなすばらしい作品の演奏、また岐阜県を含む 15 ものブースとなった企業展示、テクノプラザ、岐阜大学 VSL の見学となったテクニカルツアー等々と、岐阜の地を活かしたまさに盛りだくさんの企画であったようです。川崎先生をはじめとする実行委員の皆様のご努力に敬意を表するとともに大会長を引き受けた責任を痛感しています。

次年度は、京都で開催します。ご存知のように京都は千二百年余の歴史を持ち、日本の精神、文化、芸術の源となっています。この京都の雰囲気と最新のバーチャルリアリティ技術を融合させていかに魅力ある大会にして行くかをこれから色々と考え企画検討を進めて行く所存



懇親会 次回大会幹事からの挨拶

です。また大会の準備を通して京都に住む我々自身も、京都の魅力を再発見できるのではとっております。皆様のご協力とご支援、大会への積極的なご参加をお願い致します。

◆おわりに

舟橋健司

広報担当（名古屋工業大学）

大会が無事に終了して 1 ヶ月が経ちました。各委員からの報告原稿も集まり、この原稿をまとめています。学会誌発行のスケジュールのため、短い期間でのお願いにもかかわらず快く執筆をして頂いた関係者の方々に感謝いたします。来年は京都での開催です、また皆さんとお会いできることを楽しみにしています。